



阿南の夏の植物「ヤマユリ」

2023年7月11日

夏の山地の茂みの中に、ごらんのようにひときわ目立つ華麗なユリ（百合）が咲いています。

ユリの女王「ヤマユリ」です。

黄色い筋と赤い斑の入った豪華絢爛な姿は、まさに女王の荘厳さや威厳さ感じます。



日本特産の大型のユリで、花の長さは20cmほどもあり、1本の茎にいくつもの花がつき、その重みで茎全体が弓なりに傾いています。

花の中央には1本のめしべ、その周りには長く伸び出た6本の赤褐色のおしべ（赤褐色の部分は葯と呼ばれ、そこで花粉が作られます。）がついています。ヤマユリだけでないのですが、ユリの花粉は衣類につくと取れにくくやっかいなので、注意してください。茎にはササ（笹）のような葉っぱが互い違いに（互生）ついています。



ヤマユリは、幕末来日したドイツの医師・博物学者シーボルトによって欧米に紹介され、その後ヤマユリ等を親に品種改良され「カサブランカ」が生まれたそうです。花屋さんでよく見かける「カサブランカ」のご先祖様だったのですね。



阿南の夏の生物「ダイミョウセセリ」

2023年7月25日

いつの間にか梅雨も明け、一昨日の23日（日）からは二十四節気「大暑」（たいしょ）、一年で最も暑さが厳しく感じられる頃となりました。本校は27日（木）が1学期終業式ですので、あともう少しのガマン（？）で夏休みとなります。各地で夏祭りや花火大会などが催され、夏の風物詩がもうすぐそこまで来ています。

今日も35度前後まで気温が上昇したせいかな、何と、

どちらかというとも夏の後半の風物詩である「ツクツクボウシ」が鳴きはじめました。

[NHK シチズンラボ「セミ図鑑」ツクツクボウシ](#)



だいぶ暑く、外に出るのは躊躇われましたが、運良ければツクツクボウシの姿が見られるのではないかと、ちょっと学校周辺に出てみると、セセリの仲間の「ダイミョウセセリ」が舞っていました。



セセリとは、チョウとガの中間的な存在の蝶です。皆さんがよく見かけるセセリは多分小さなチャバネセセリじゃないかと思いますが、美しいチョウとは異なりかなり地味なチョウです。ガのように胴体が太く、飛び方もひらひら舞う感じでなく素早く直線的で、触覚の形が写真のように先端が脹らんだ後細くなっているのが特徴です。チョウやセセリは翅を立てて閉じて止まるのが一般的ですが、ご覧の通り「ダイミョウセセリ」は翅を広げて止まっています。セセリらしからぬ止まりをするのが「ダイミョウセセリ」です。

翅の紋様も多少あり「ダイミョウセセリ」もよく見れば綺麗なチョウに見えますね。名の由来は、この紋様が大名の袴（かみしも）の紋に似ているから、と、葉にとまった姿が大名行列でひれ伏した姿に似ているから、と2説あるそうです。

阿南の夏の生物「ノコギリカミキリ」

2023年7月26日

今朝も生徒の皆さんの登校時に合わせて校門に立っていると、何やら黒くて大型の素早く移動する物体が目に入ったので、一瞬、もしやゴキブリ？って思っ



てよく見るとカミキリムシでした。全身真っ黒で、大型（今回は5cm 近くありました）、触覚も長く、いかにも噛まれると痛そうなアゴをもつ「ノコギリカミキリ」です。

ノコギリと聞くと、多分かっこいいフォルムのノコギリクワガタを連想する方が多いでしょう。カブトムシ



と並んで子ども達の人気の的ですね。皆さんにとってどのカブトムシ、クワガタムシが一番ですか？（でしたか？）

今回紹介している虫はクワガタでなくカミキリです。でも、この虫よく見ると、大型で艶のある黒色、重量感のあるどっしりした風格あるフォルムは、決してカブトやクワガタに引けを取らないと思います。



このノコギリカミキリの名の由来は、鋸（ノコギリ）のような触覚からきています。（写真撮りが下手くそで触覚にピントが合ってなく、その様子が伝わりにくくすみません。）

また他の特徴としては、大型の甲虫（カブトやクワガタ）と違って動きは素早く、カツカツと忙しく動き回ります。多くのカミキリムシの幼虫は木に穴をあけ、その木を枯らしてしまうこともあり、（特に果樹農家や昔では蚕（カイコ）農家を中心に）害虫扱いされていることが多いのですが、この「ノコギリカミキリ」の幼虫は枯れ木や朽木を食べますので、その意味では害虫にはなりませんのでご安心を。

阿南の夏の植物「タマアジサイ」

2023年8月1日

庭のアジサイ（紫陽花）は梅雨時の6月から7月に咲きますが、このアジサイは梅雨も終わって、真夏に咲き始めます。阿南高校の周辺の木陰でやや湿ったところに玉のような丸い蕾（つぼみ）をつけた紫陽花が咲き始めました。タマアジサイです。



丸いつぼみの苞（ほう）が開くと、細かな淡い紫色の花が多数現れ、その周囲に数個の白い花弁の装飾花が花の縁を飾ります。花の中心にある紫の粒々が本来の花で、両性花と呼ばれ雌しべと雄しべがそろっています。（小さな粒々の状態はまだ開花前で、開花してすると細長い雌しべ・雄しべが見られます。）よく庭先で見かけるアジサイは、花全体が装飾花となっていて、花びらと思っていた部分は萼片なので、ガクアジサイなんて呼ばれることもありますね。



気づきました？ ハナグモやカマキリが花の蜜によってくる獲物を、じっと潜んで待っています。



阿南の夏の生物「タマムシ」

2023年8月2日



阿南高校の校門脇にあるモミジの幹で、キラキラと美しい「タマムシ」を見つけました。本当、いつ見ても綺麗な虫ですね。

タマムシは、カンカン照りの8月夏の昼間によく活動します。

それは、タマムシのキラキラした金属光沢と関係が深いからです。虫たちの天敵といえば鳥ですが、多くの鳥たちはキラキラした輝くものを嫌います。鳥よけにCDをぶら下げている所をよく見かけますね。あれと原理は同じです。キラキラは人には目立ちますが、天敵の鳥には効果絶大で、鳥よけという理由があったのです。



タマムシの成虫はエノキの葉が好物で、産卵はエノキの他にケヤキ、コナラ、クヌギ、シラカシなどの広葉樹にするそうです。飯田下伊那南部にはこのような樹種がとても多く、子どもの頃から夏のよく晴れた青空に、キラキラッと輝くタマムシの飛ぶ姿をよく見かけたものです。



タマムシの金属光沢は死んでも失われないため、古くから人を魅了してきました。奈良県斑鳩町の法隆寺にある飛鳥時代の厨子「玉虫厨子」（国宝）は有名ですね。実際には見たことはないのですが、社会科の教科書などの写真で見たり聞いたりしたことはあるのではないのでしょうか。



阿南の夏の植物「ウバユリ」

2023年8月3日

鬼渡沢川周辺のやや薄暗い湿った樹木の下に、ユリの仲間の「ウバユリ」が咲き始めました。以前紹介した「ヤマユリ」のような華やかさはほとんどなく、大型の百合ですが、花は半開き状態、色も緑がかって目立ちにくいので、目を留める人も少ない花かと思えます。



姥（乳母）とは子守役の年老いた女性のことで、昔は歳をとれば歯がない



方が多かったことから、花が咲く頃に葉がない姿が、葉（歯）がないユリということで、ウバユリ（姥百合）と名がついたそうです。実際には写真のように葉っぱはありますので、花のつく茎（柄の部分）が長く、その部分に葉（歯）がないためかなと思います。

ウバユリの亜種（変種）に「オオウバユリ」がありますので、多分こちらの写真（1、3枚目）は「オオウバユリ」だと思われます。オオウバユリはウバユリより更に大型で、花の数もかなり多いのが特徴です。

ちなみに、最後の写真のオオウバユリ左の白い花を咲かしている植物は「ヤブミョウガ」で、ミョウガと呼ばれていますがミョウガの仲間ではなく、ツクサ科の植物です。葉が薬味によく使うミョウガ（茗荷）によく似ているためその名がついています。



阿南の夏の植物「ノリウツギ」

2023年8月8日



通勤途中の国道151号線、阿南町富草の古城あたりで、爽やかな白い花の咲いてい

る中低木の植物（3～5m ぐらいあります）が見えるので、帰りに立ち寄ってみました。

アジサイによく似た（野生の）「ノリウツギ」です。花の縁を飾っている装飾花も見られ、アジサイにとってもよく似た花ですが、花全体の形状は円錐形で、横から見ると三角の形をしており「ピラミッドアジサイ」なんて呼ばれることもあるそうです。アジサイもウツギも同じアジサイ科の仲間で、装飾花と両性花が咲いています。（8/1 校長ブログ「タマアジサイ」）



ノリウツギ（糊空木）の「糊」とつく意味は、和紙を漉く（すく）時に使う糊として、この木の皮を煮立ててとったことから、名前がついたそうです。そのため別名として「糊の木」とも呼ばれたそうです。「空木」はわかりますよね。（5/1 校長ブログ「ウツギ」）

牛乳パックをリサイクルして、手漉きハガキを作った経験はありますか？その時、糊としてよく洗濯糊を使いますが、昔の人は、何から何まで自然を利用していたんですね。

このノリウツギを改良した園芸種は、花の少ない夏に咲く大きく華やかな花木として、よく庭でも見かけます。

夏の花「タカサゴユリ」

2023年8月21日

お盆頃からあちこちで白い「タカサゴユリ（高砂百合）」が咲きはじめています。庭やちょっとした空き地、植え込みの隙間など、また、道路の法面や路傍にも見事に白い大型の花を咲かせています。

在来種の「テッポウユリ（鉄砲百合）」（開花時期は6～8月）とかなりよく似ており、こちらのタカサゴユリは台湾原産のユリで、よく見るとテッポウユリは純白な花に対して、タカサゴユリは花の外側に赤紫色または緑色の濁ったスジ（ライン）が入り、また葉は細い葉を密につけています。そのため、別名「ホソバテッポウユリ」とか「台湾ユリ」とも呼ばれているようです。





外来種の「タカサゴユリ」はとても生命力が強く、在来の日本の原種ユリを脅かす存在になりつつあり、最近では国立環境研究所から注意を呼び掛けているほどですので、綺麗だからと言って安易に増やさない



ようにしたいですね。(特定外来生物のような法的な指定はなく、[侵入生物データベース](#)に記載されています。)

阿南の秋の草花「ツリフネソウ(釣船草)」

2023年9月6日

横から見ると、(花弁と萼片が複雑に組み合わさった)花の袋状の部分



の部分が船のように見え、茎からつり下がって見えることから「ツリフネソウ(釣船草)」と呼ばれています。花の色はご覧の通り赤紫色で、近縁種の黄色の花を咲かせる「キツルフネ」に対し、ムラサキツリフネと呼ぶ場合もあります。林や森の中の湿地や小川の縁のかなり湿ったところで見かけます。今回の写真は阿南町古城(R151号線沿い)で見かけました。



花の長さは3~4cmほど

で、後方の「距(きょ)」と呼ばれる部分はクルリと巻いていて、とても愛らしいです。中には蜜があり、マルハナバチなどの昆虫が蜜を吸っていますが、ツリフネソウ全体に(人には)毒性があるため、蜜は吸わない方がいいようです。



ツリフネソウ、キツルフネは同じツリフネソウ科で、園芸種のハウセンカやインパチェスも同じ科です。ハウセンカの種、皆さんも経験があるかと思いますが、花の後実ができ、その実を摘もうとすると“パチッ”と種が勢よく弾き飛びますね。少しでも遠くへ種を飛ばして子孫を広げるための戦略で、ツリフネソウも小さな実ながら種が弾き飛びます。また、生物実験「花粉管の成長」でよくハウセンカやインパチェスの花粉を使うのですが、以前阿南高校で、



ツリフネソウを使って観察したこともありました。

近くの根羽村茶臼山に自生している「エンシュウツリフネソウ(遠州釣船草)」が、8月29日付けの信濃毎日新聞に記載されています。ツリフネソウに比べ、花も植物全体も小型で、花の色は薄紫色。花は葉の下に隠れるように咲くため、しゃがんで探さないと見つけられません。見頃は9月上旬までとの事ですので、行かれない方は下記より秋の訪れを感じてください。[信濃毎日新聞デジタル「エンシュウツリフネソウ\(遠州釣船草\)」](#) (動画あり)

阿南の秋の草花「ツルニンジン(蔓人參)」

2023年9月8日

名の由来は、蔓(ツル)植物で根が薬用人参(高麗人参)に似ていることから「ツルニンジン」と呼ばれています。151号線沿いの阿南町古城の林縁で見つけました。(以前紹介したノリウツギの辺りです。)



下向きに釣鐘状の赤紫色の筋・斑紋が入った特徴的な花(大きさ3~4cm程)をつけます。つぼみは先の尖った風船のようで、秋の七草のキキョウのつぼみとよく似ています。それもそのはず、ツルニンジン

はキキョウ科の植物でした。花の内側の斑点が、“じいさんのそばかす”という意から「ジイソブ」という別名もあるそうです。木曾地方の方言で、そばかす=ソブと呼ぶことから「ジイソブ」と呼ばれたそうです。ジイソブとくれば「バアソブ」は?となりますが、ジイソブ(3~4cm程度)よりひとまわり小



さな花(2~3cm)で、葉に白い毛が生えているのが近縁種の「バアソブ」だそうです。バアソブはかなり希少で、絶滅危惧種となっているようです。

秋の草花「ツリガネニンジン(釣鐘人參)」

2023年9月13日

前回紹介しました「ツルニンジン」と同じキキョウ



科の「ツリガネニンジン」です。通勤途中の下條村陽阜（ひさわ）で咲いているのを見つけました。

花の形も釣鐘の形で、小さなベルみたいですね。やはり根が薬用人参（高麗人参）の形に似ていることから「ツリガネニンジン」と呼ばれています。



（※ 人参はセリ科、薬用人参はウコギ科で、それぞれニンジンと名がついてますがどれも近縁ではない別の科です。）



かつては秋の草原を代表するようなありふれた植物だったそうですが、現在はそこそこ珍しいのかな？なかなか見ることも少なくなっています。

草丈は意外と大きく1m以上となり、葉もほとんどないスーと伸びた茎に、何段かに分かれて、見た目も涼しげな薄青紫色のやや小型の花（1.5～2cm）がいくつかがつき、風にゆられると秋の到来を感じさせます。



春の若い芽は、山菜としてとても人気があるそうですよ。

阿南の秋の草花「キバナアキギリ（黄花秋桐）」

2023年9月30日

黄色のサルビアみたいな花ですね。



それもそのはず、キバナアサギリの学名は *Salvia nipponica* と属名はアキギリ属＝サルビア (*Salvia*) なんです。種名はニッポニカ (*nipponica*) ですから、学名から見れば「日本のサルビア」です。

ちょっと難しい話になってしまいますが、生物学において世界共通で生物には学名がついていて、種名と属名で表しています。この表し方を二名法と呼び、生物の分類学では超有名なリンネによって提唱・体系化されまし



た。Homo sapiens (ホモ サピエンス) なんか聞いたことがあるのではないのでしょうか。Homo sapiens とは我々ヒトのことですよ。

さて、話はキバナアキギリに戻します。この花ですが、国道151号沿いのホームセンターから入って阿南第一中学校へ行く途中の道の林縁で見つけました。葉っぱが桐に似て秋に淡い黄色の花が咲くことから「キバナアキギリ」と名が付けました。

花の先から紫色した細い角（ひも？）見たいのが伸びてますね。そちらはめしべの一部です。写真を撮っていると、ハナバチが蜜を吸いに寄って来てました。

ご覧の通りハチは頭を突っ込んで蜜を吸っています。潜った時に背中に花粉が付着し、確実に細く伸びたためしべに受粉するようになっているようで、なかなか植物たちも子孫を残すために考えてますね。



阿南の秋の草花『キツリフネ（黄釣船）』

2023年9月30日

以前紹介した「ツリフネソウ（釣船草）」の仲間、ご覧の通り、黄色の花が咲くため「キツリフネ（黄釣



船）」と名がついてます。ツリフネソウと似たようなやや湿った沢沿いなど好み、今回も半日影

の湿った沢沿い近くで見つけました。ただ、ツリフネソウは群生であちらこちらで見られますが、キツリフネはあまり群生は見られません。花の後方の距（きよ）と呼ばれる部分もツリフネソウと異なり、ツリフネソウの距はクルクルっと丸まっているのに対し、キツリフネは丸まっています。他に、葉の形状にも違いが見られます。



（ツリフネソウの葉の先端はとんがっているのに対し、キツリフネの葉は丸型です。）